

マーガレットの湿害について

佐藤義機・安部秀雄

この実験はマーガレットをたん水状態で栽培した場合、苗の生長における経時的な変化とその回復度を調査するためにおこなった。

実験は 1976 年 12 月 1 日から翌年の 1 月 12 日にかけて実施した。品種は白花種を用い、2 段階の生長苗を 5,000 分の 1 アールワグナーポットに植付け、一定期間均一栽培をしたのちたん水処理をおこなった。

たん水時の苗の大きさについては小さい苗のほうが大きい苗にくらべてたん水による障害の発生が早かった。

たん水状態で栽培したマーガレットの大きい苗の根の活力はたん水 1,3 日処理で 37.7%, 6 日処理で 56.8%, 14 日処理では 78.2%低下し、一般的にたん水期間が長くなるほど、根の活力は急速に低下することがわかった。

地上部の蒸発散量と根の活力の間にはきわめて高い相関があり、蒸発散量が極端に減少すると根が障害を受けており、根の活力が低下していることがわかった。

障害の発生した株の地上部重と地下部重(T/R)の割合はたん水期間の長さに比例して高くなった。